

# 中国語インテンシブプログラムについて

秦 耕 司

## はじめに

中国語インテンシブプログラムは今年度6年目を迎え、第一期中期計画の最終年度に当たる。完成年度と言っても、語学教育の場合、実際の完成年度は今年の1年生が4年生になった時である。実際、今年の1年生は、授業を通して見る限り、今までとは明らかに違った反応を示している。昨年度から試みに授業に新しい方法を少し取り入れ、今年度から本格的にその方法を取り入れたのであるが、単語や文を記憶するのも早いし、口頭で日本語を中国語に移すのはもちろん、中国語の質問に中国語で答える反応も正確で流暢で早い<sup>1)</sup>。これは四月当初からの発音練習が着実に身に付きながら進んだのが原因で<sup>2)</sup>、入門初期からの学習過程における発音学習の習得効果が、ようやく形になって表れてきたと言える。学生自体は通過集団であるが、このような実績を持つことは、一つには、当該学生が発音学習の効果と重要性を認識することはもちろん、教師自身の心構えが揺れることなく、教育姿勢が不動のものとして安定するし、何にもまして事実を以て語る後生への影響が大きい。学生がどのような力を付けたか、どこまで力を付けたか、対後生への教育指導および学習意欲への影響を考えると、このような実績を作ることは非常に大事である。教育は、長年の積み重ねによって、徐々に効果が表れてくるものであることの、一つの実践例と言

えよう。

これからも解るように、この6年間は文字通り試行錯誤の6年間であった。ここでインテンシブプログラムという特別の外国語教育プログラムが開設された背景をふり返り、6年間の経験をふまえ、次期中期計画に向かって方針を立てるのは、新たな出発点として必要なことである。と同時に、ここでそれを公開しておくことは、中国語インテンシブプログラムの基本姿勢や全体像について大学として共通認識を持つことであり、また学外、特に高校生に対して中国語インテンシブプログラムの趣旨や詳しい内容を伝えることであるので、本学の中国語インテンシブ教育を発展させる上で極めて有意義であると思われる。

大学が独立法人となって担当者の立場や位置付けが大きく変わった。担当科目に対する責任が格段に大きく重くなったのである。それは、教員が施した教育に対して、その成果が求められることであり、大学が外部に対してプログラムの説明責任を負うことでもある。それで大学は担当者の意向を理解し、尊重し、可能な限り支援する態勢を採ることとなった。今後担当者と大学が健全な相互協力関係を築いていくのに資するためにも、中国語インテンシブプログラムの教育方針や教育内容など、その全体像を公表しておくことは極めて意味あることと思われる。

中国語インテンシブプログラムは、発足に当たってその全体構想を立てた<sup>3)</sup>のであるが、時間的に切迫していた段階での構想でもあり、十分な推敲を経たとは言えないものである。しかし学生の反応と習得状況を見ると、第一期で打ち立てた基軸となる教育方針および教育内容や教育方法は、基本的には理に適ったものであったと言える。今後は教材の内容やレベルを学生の実質に合わせ、個々の細かな指導方法を学生の実態に合わせた形にし、インテンシブ教育の趣旨などをしっかりと学生に浸透させ、学生が中国語インテンシブプログラムを選択した意味を自覚・認識するようになれば、当方の期待する効果が表れてくるのは必定であると思われる。

本稿は、第一期で立てた全体構想を基に、6年間の教育指導の経験を生

かし、学生の実態を踏まえながら、次期に向けて今一度中国語インテンシブプログラムの全体構想を確認しつつ、より深化かつ発展した形で描こうとするものである。

## 経済学部中国語教育の流れ

本学の経済学部では、中国語インテンシブプログラムがスタートをする前に、開学当初からの長年にわたる中国語教育の伝統と実績がある<sup>4)</sup>。本学の大きな特色の一つである中国語インテンシブプログラムを、その歴史の中に位置付けるためにも、ここで県大の中国語教育の歴史を振り返っておくことは、大変意義のあることと思われる。位置付けをすることにより、中国語インテンシブ教育を本学に根ざしたプログラムにすると同時に、将来への発展性を備えたものとするができるからである。

第二外国語は、開学以来長期にわたって中国語、ドイツ語、フランス語、スペイン語の4ヶ国語で、初級、中級の8単位が必修、選択は上級2単位、時事2単位の計12単位であった。第二外国語と言えども、充実した科目設定が可能な単位数と、それぞれの語学に専任教員を1名配置し、会話担当はネイティブスピーカーという方針を、交通が不便なところにあっても一貫して堅持していたのは、発足当初から高度な基礎力と実践力の養成を重視していたことの表れであろう。更に注目すべきは、会話科目は初級ではなく、2年次の中級に配置していたことである。中級は講読と会話の2科目であった。

外国語教育の中核は中級教育である<sup>5)</sup>。第二外国語にあって、中級に講読と会話を開設したのは大きな意味がある。中級の講読は、読解力の基礎ができ、上級につなげることができるし、初級の基礎の上に立っての中級での会話学習は、会話表現をより確実に習得できるからである。

初級段階では習得できる語彙数も少なく、文法項目も少ない。その上発音すらおぼつかない。このような条件での会話の授業は、実りが少ないの

は明白であろう。後年学科の増設に伴い、中級の科目が2科目から1科目に削減された時、講読を廃止し会話1科目とすれば、語学力の向上が望めない上に、上級につなげることが出来ないで、会話科目を初級に移したことがあるが、果たしてあるネイティブスピーカーの教員から、1年次での会話は無理だから元通り2年次に戻して欲しい旨の要望が出されたのである。また初級に会話を置くと、それだけ習得する語彙量と文法項目が少なくなり、読解力も付かず、基礎力の養成は望めない。その上第二言語習得の研究で明らかになっているように、外国語の知識があまりなく、外国語の能力がまだ不十分なうちに無理に話すことを強制すると、母語からの転移が起り、変な外国語を身に付けてしまう危険性がある<sup>6)</sup>ことである。2年次におけるネイティブスピーカーによる会話科目の設置は、外国語学習々得段階の實質に適ったものである。とすれば、開学当初外国語科目のカリキュラムを考えた人は、基礎力教育を基礎とした実践力の養成を視野に入れた語学教育についての識見が高かったことが窺えよう。我々はそのような先人の後を継承していることを正しく認識し、自覚し、誇りと感謝の念をもって更に継続発展させるチャンスを活かさなければならないだろう。それは本学の外国語教育の伝統と特色をいっそう発展させることでもある。

幸い中国語は、1983年に第一外国語として発展開設され、翌年から専任教員が1名、中国人嘱託講師が1名増員されることとなった。しかも嘱託講師は、重点大学の武漢大学を皮切りに、中国の各大学から現職の教員を継続的、定期的に招聘することになり、ここに充実した教育指導体制が敷かれることとなったのである。

また、第一外国語中国語がスタートした年に、試みに夏休を利用して1ヵ月ハルピンの重点大学哈尔滨船舶工程学院で提携校の長崎総合科学大学の協力を得て、佐賀大学と合同で海外語学研修を実施し、その効果を実感することができた。そこで、第一外国語の学生が三年生になった時に、それまでの学習の成果を検証し、いっそうの向上を目的として現地語学研修を企画し、1985年からは本学独自で福州市の福建師範大学で毎年実施す

ることとなった<sup>7)</sup>。それから中国に留学する学生が出始め、ここに中国語教育は大きく展望が開けることとなったのである。

こうした実績を積み重ねて、1993年からは中国語海外語学研修が制度化され、大学の正規の授業科目として認められ、単位が認定されるようになったことは、大学としていっそう意義のある現地研修となったと言えよう。

こうして優秀な学生を社会に送り出すことができるようになり、中国語を活用して活躍している卒業生も多く、会社から高い評価を得ているのは、本学の中国語教育が実社会からも認められていることでもあり、喜ばしい限りである。当時あっては、中国語非専門課程の大学にあって、中国の大学から教員を招聘することも、現地で中国語研修をすることも、全国的にはまだ珍しく、本学の中国語教育が如何に時代の先端を進んでいたかを窺い知ることができる。

小稿は中国語インテンシブプログラムの目的、目標に焦点を当て、どのような方針を立て、どのようなカリキュラムを組み、どのような教材を作成編集し、どのような授業をしたらよいか、中国語インテンシブプログラム全般にわたっての考察と紹介である。

## インテンシブ教育とは何か

インテンシブ教育とは、外国語学部や文学部以外の学部で外国語を重視する教育で、専門は何であれ、高度な外国語能力の習得が必要であるとの認識を出発点としている<sup>8)</sup>。1900年に開設された慶応大学藤沢キャンパスのインテンシブ教育を嚆矢とし、国公立大学、私立大学を問わず、全国的に広がっている。

学部を問わず積極的に高度な外国語能力の習得が必要であるとの認識は、時代の要請に他ならない。会社企業の営業取引の分野に関係なく、外国とのビジネス関係は拡大しているし、大学や公的機関においても文化交流や

人的交流は盛んになってきている。今やどの分野においても、外国とのビジネスや相互交流はなくてはならないほど密接になっており、本学の卒業生の話の聞いても、それはいっそう身近な現実として伝わってくる。本学では第二外国語で学習した者ですら、昭和時代より中国語で仕事をしている卒業生が少なくない<sup>9)</sup>。中国と縁の深い長崎県の県立大学で中国語インテンシブプログラムを設置しているのは、社会的要請のみならず、本学の中国語教育の歴史と実績からも当然であろう。

時代の要請と社会的目的を背景とした中国語インテンシブ教育は、本学の実態と理想に合せて、プログラム開設の目的と目標を掲げ、その実現に向けて教育方針を立て、カリキュラムを組み、教材の作成編集を進め、授業内容と授業方法を策定するプログラムである。

## 中国語を必要とする社会背景

ビジネスの上で中国語の必要性や重要性が叫ばれるのは、今や珍しいことではない。しかし実際にそれがどの程度なものか、直接、間接の情報はあるにせよ、断片的で漠然としたままである。おりよく『週刊ダイヤモンド』2011.1・8が「今年こそ英語&中国語」の特集を組んでいるので、そこから関係記事を引用することとする。

主要100社に英語以外に求められる外国語は何か、というアンケートに対する回答は、複数回答での次の通りである。

中国語	53社
スペイン語	5社
韓国語	4社
ドイツ語	3社
その他	5社

また中国語に傾斜する企業として、コマツ、伊藤忠、資生堂を紹介しているが、コマツは2010年4月に入社した新人社員190人向けの語学研修が、

従来の英語から中国語に切り替えられたことを紹介している。対中国との関係における3社の状況は次の通りである。

### 中国語の会話力が求められている

#### 中国語研修に注力する企業

会社名	制度	目的	派遣対象・規模	派遣期間・研修期間	中国売上高 (全体に占める 比率)	中国駐在員 数(全体に 占める比率)
<b>ITOHU</b> 伊藤忠商事	特殊語学 派遣制度	日本語、英語に続く 第3言語 (主に中国語)の習得	入社8年目までの 総合職全社員。 年間最大100人	4~6ヵ月 (現地留学)	157億円 (12%)	186人 (25%)
<b>KOMATSU</b> コマツ	新人 中国語研修	中国という異文化の 理解と自発的な中国 語学習のきっかけ	本社採用の 全新入社員190人 (2010年)	2週間 (日本)	2445億円 (19%)	150人 (非公表)
<b>SHI/EIDO</b> 資生堂	グローバル キャリア 開発プログラム	グローバル人材の 育成	同一部門勤務3年以上 の社員から公募で10人 (うち半数弱が中国向け)	2年 (日本1年、 現地1年)	約800億円 (10%強)	50人 (約40%)

\*売上高は2010年3月期。伊藤忠商事の数値は当期純利益

『週刊ダイヤモンド』2011.1・8 p.63

また、中国では現地で中国人の通訳を雇っている企業も多いので、一見語学力は必要ないように思う人もいる。それについては次の体験に基づく見識が、直接当該言語で交渉、商談することの必要性、重要性を適切に物語っている。

田邊社長自身は英語に不自由はないが、76歳の高齢で海外を走り回ることではできない。後継者へのバトンタッチを急ぎたい。その際に譲れない条件が英語力だ。グローバルメーカー幹部と親密な関係を築き、商談で好条件を引き出ししていくには、英語で直接対話するトップ営業が欠かせない。「通訳を介しては勝負にならない」と言い切る<sup>10)</sup>。

これは、自ら外国語を習得した人が、特に現地で直接当該外国語でコミュニケーションを営んだ経験をして、初めて実感できることである。通訳を付けている人は、直接原語でコミュニケーションをとった経験がないので、コミュニケーション過程における、相手の反応の違いや意思の変化な

どの重要な点を理解できず、言外に含められている信号や、相手の真意をキャッチできない<sup>11)</sup>。担当者が直接原語で商談ができるか否かは、満足のいく商談が成るか成らないかの境界であろう。複数の外国の担当者がある交渉会議の場では、外国語が苦手であったり、ある発言に対して反応が遅ければ、どんどん取り残されて相手にさえされないのである。これだけ国際化の進んだ時代に通訳を付けるということは、それだけ立場が悪くなることでもある<sup>12)</sup>。対人関係、人間関係を重んじる中国人とのコミュニケーションでは、発音のよさ、中国語の表現力、ユーモア感覚、中国に関する文化、歴史、事情などの知識も、目に見えないところで武器になっていることは、中国語でコミュニケーションをとっている人は、誰でも知っている。

大学は、社会に貢献できる人材を養成する教育機関である。と同時に、学力と能力を身に付けるために、学問的な理解と原理的な理解、および体系的な理解を基礎とした学力、能力を養成・習得する教育を施す場でもある。即戦力とか、実践力とか、技術的な面にのみ焦点を当てるのでは、学生の努力は学士力とは無縁の段階で止まることになり、大学教育としての価値がなくなるであろう。外国語学習は、技術習得の面が強い。であるから、大学における語学教育は、技術習得の面を全く考慮しないことはできない。ましてやインテンシブプログラムの目的は、実践運用能力の養成である。しかし、本来学生自身が個人で努力をすべき実践力の養成を、授業で果たそうとすると、膨大な時間とエネルギーを必要とする上に、高いレベルに到達することは望めなくなる<sup>13)</sup>。そこで県大の中国語インテンシブ教育では、大学教育の本質を失うことなく、実践力の養成という目的実現のために、応用力へと発展する基礎力養成を主眼とすることとした。技術面だけの教育では、応用力は付かず<sup>14)</sup>、語学能力にはならない。目的意識を持って中国語を学習する学生に対して、目標を掲げて教育指導をする中国語インテンシブプログラムは、この点を踏まえて教育方針を立て、教育内容と教育方法を策定し、具体的な教育指導を施さなくてはならないのである。



## 中国語インテンシブプログラムの目的と目標

中国語インテンシブプログラム開設の目的は、卒業後に中国語を用いて活躍する人材の養成であり、目標は中国語による高度なコミュニケーション能力を身につけた人材の養成である。いずれも実践力養成を標榜しているが、上述のように、大学という公的機関の教育であるので、大学という特質や性格を前提とした教育を考慮しないと、語学塾と何ら変わらないことになる。大学としての教育を考慮するという事は、教育方針を初めとして、教育内容、教育方法、教育レベルなどを指す。

## 県大における教育・学習環境と条件

インテンシブプログラムの中国語教育を考える前に、その前提条件となる教育・学習環境と条件を確認しておく。

1. 教育時間 大学が提供する教育時間と年次配分は次の通りである。

1年次 週4コマ 90分×4コマ×15回×2期=180時間

2年次 週4コマ 90分×4コマ×15回×2期=180時間

3年次 週3コマ 90分×3コマ×15回×2期=135時間

4年次 週1コマ 90分×1コマ×15回×2期= 45時間

総計 418時間

コマ数は、丁度専門課程と第二外国語との中間である。いちばんの基礎となる発音と、最終目的である会話力養成の難しい中国語としては、まずまずの時間数で、努力をする学生にとっては、目標達成に必要な基礎力（基礎学力と基礎技術力）を身に付けるのに適切な設定と言えよう。

2. 教員 日本人教員2名、中国人教員1名

1人当たり5コマないし4コマである。プログラムを設けて、方針、目的などを掲げ、目標に向かって教育をする場合、教員数はあまり多くない方がよい。逆に少なすぎるのも効果の面でやや物足りなさがある。各担当

者がプログラムの全体像を把握し、自分の担当科目の位置付けや意味を理解、認識している必要があることと、実践語学は、ある程度の（教師の）人数の発音・音声と説明を聴くのがよいからである。理想を言えば、日本人教師、中国人教師ともに複数担当をするのがよい。初級段階では、日本人学生にとって解りやすく説明のできる日本人教師を多く、力のついた上級段階では中国語で授業のできる中国人教師を多くするのが、効果的にはよいであろう<sup>15)</sup>。

3. 言語環境 日常生活において中国語を聴いたり話したりする言語環境がない。

会話教育はこの点を考慮すべきである。日本で学ぶ中国語は、言語環境のある生活言語ではない。教室という限定された場で学習をして習得する外国語である。この区別のないままに会話教育に重点をおくと、無駄が多くなる。現地での教育と日本での教育の重点のおき方に違いが出る理由はここにある。従来の語学教育ではこの視点が考慮されていなかった。会話力の養成は、学習々得言語としては最終の到達目標である。つまり、読解力や読書量および作文力を基礎として、各人の努力により最終的に到達する総合的的技能である。授業ではその目標到達が可能になるように、授業を組み立て教育指導をするのである。到達レベルは、教育方針と教育内容により大きな違いが出てくる。よりレベルの高い会話力を身に付けるには、どのような教育指導をしたらよいか。ここに教育方針、教育内容、教育方法などが大きな比重を占める理由がある。

以上の諸条件をふまえると、実践力そのものを養成するのではなく、より高度な実践力を養成するために、応用力へと発展するしっかりした基礎力の構築を主眼とすべきであることが理解できよう。

## 会話の位置づけと四技能

会話力は、語学的技術力の総合力である。所謂語学の四技能との関連で

みることにする。

聴く力の基盤は読解力である。読解力がなければ聴いても解らない。読解力があればあるほど広い範囲の中国語が聴いて解るし、読解力のレベルが高ければ高いほど、より高度な中国語が聴いて解る。つまり聴く力を付けようと思えば、より高度な中国文を読解する力を付け、幅の広い範囲の内容の中国語の文章をなるべくたくさん読み、音声とともにインプットすることである。筆者の学生時代に、みんな北京放送を聴いて解るようになりたいと、人民日報を読んでいたが、北京放送のニュース番組など、人民日報と内容が重複するものが多かったので、ニュースを聴き取る学習方法として、人民日報の講読は極めて有益であった。以前中国に留学中の学生からも、教材が会話文から講読用に換わったら、語彙量や表現法が格段に豊富になり、力の付き方が全然違いますと、講読学習の価値を経験によって認識した感想が寄せられたことがある。

話す力の基盤は作文力である。母語は生まれ育った所で、周囲の環境によって自然に習得する言語であるから、話すことが先にある。作文力は一定の年齢に達してから教育を受け、意識的に学んで身に付ける学習々得言語である。

外国語は学習々得言語である。話す力も学習により習得する技能である。外国語の会話文は、日本には言語環境がないので、日頃はまったく耳にすることがない。加えて具体的な場面を背景とした、断片的な文の集合であるので、応用力へと発展する要素に乏しい。また同じ場面でも表現法や類似表現の豊富な中国語では、そのまま使えないのが、会話場面の実際である。学習する時間の割には発展性がなく、語学力の向上は、往々にして学んだ語彙や表現に止まる。

つまり、より高度な会話力を身に付けようと思えば、一見遠回りと思える読解力と作文力を磨くのが、結局は早道なのである。こうしてみると、日本人教師と、ネイティブスピーカーの教師の役割が非常に明確に見える。お互いに有利な能力を最大限生かし、相乗効果を狙えるならば、語

学教育にとって、この上なく喜ばしいことである。

## ネイティブスピーカーの役割

外国語教育において、ネイティブスピーカーの役割は極めて重要である。それは、実践力の格段の向上と、語感を磨き上げるという総合的な仕上げを担うという、日本人教師には望めない能力と技術を具えているからである。しかし、この重要な役割を担っている人材が、多くの場合会話担当に限定させられている感がある。有能で教養ある知識人を、会話の授業に閉じ込めておくのは、人材の浪費と言ってよい。自分の能力を發揮する場がなくて、もどかしい思いをしているネイティブスピーカーも多いと思われる。我々日本人担当者は、ネイティブスピーカーとしてもっとその能力を十分に發揮してもらう教育指導を考えるべきであろう。もちろん日本人教師にはできない教育である。それを挙げておく。

1. 発音、音読力の養成
2. 聴く力の養成
3. 作文力の養成
4. 語義の説明による語感の養成

簡単に説明をしておこう。

1. 発音指導は、日本人教師との相乗効果がある。発音の原理を学生に解りやすく説明し、発音練習の手ほどきをするのは、日本人教師の方が向いている。中国人教師は、きれいな標準音の持ち主であるので、同じ時間を費やすなら、説明に貴重な時間をとるよりも、実際の肉声発音を聞かせ、直接指導練習をする方が効果的である。日本人教師が導入、練習し、中国人教師が練習し仕上げるのである。

2. ここで言う聴き取りとは、教科書を用いた聴き取りの授業のことでない。教材の単語の意味や内容、文法などすべてにわたって中国語で説明をすることである。この教科書の文字から離れた内容の中国語を聴くこ

とが、想像力や類推力を発展させながら、幅広い範囲の話題の聴く力を付けることになる。内容に関連した話題を中国語で提供することは、聴き取りの力を“听写”に比し、大幅に向上させることができる<sup>16)</sup>。

3. 作文は非常に大事である。最も効果的な指導は、学生が書いた文章を、自然な中国語に修正し、それを暗唱させることである。たとえ学生自身が書いた中国文が、添削により全て姿を消したとしても、その内容は自分の言いたいことであるので、効果は名文を暗誦する比ではない。これが最も確実に中国語らしい表現の中国語を生産する力を付ける方法である。

4. 次に単語や連語の語義の説明である。この説明を中国語ですることにより、中国語のニュアンスがつかめるようになるとともに、語感を磨くことができる。丁度、中日辞典の説明と、中中辞典のそれとの違いである。それを生きた音声言語で学生に触れさせるのである。この中国語による語義の説明が、単語の持つ本質的な意味を感じ取る能力と感覚を身に付けることになり、その単語の意味範疇に広がりを持つようになり、運用力が付くという、他の教授法では得られない、非常に有益で重要な教育方法である。精読との相乗効果が期待される。

以上4点は、ネイティブスピーカーの特質と能力を最大限生かした教育指導であり、ネイティブスピーカーにしかできないことである。ネイティブスピーカーに会話の授業だけを依頼するのが、如何に人材の浪費であるかが解るであろう。ネイティブスピーカーによる会話の授業は確かに楽しい。しかし、せっかくの楽しい授業を、語学力が向上する基盤となる能力を養成する授業として生かさなければ、人材の能力を埋没させることになる。

中国語インテンシブプログラムの教育は、以上の諸点を踏まえた上で方針を立て、カリキュラムを組み、授業内容を設定し、授業方法を考案すべきである。

## 教育方針

教育方針は、以上の諸条件を考慮しなければならない。条件を考慮しない教育は、目標を達成できないばかりか、教育の内容をも歪んだものにしかねない。健全な教育を実施するためには、語学教育を取り巻いている条件や環境をきちんとおさえておく必要がある。

現地での教育は、生活の場における教育であるので、初級段階では幅広い実践力養成が主となり、それを日々の実生活で生かし、消化し、応用発展させることができる。習得も早い。日本における教育・学習は、実践する場がなく、日常使用する環境がないので、場面即応式の実践教育は、語学力として定着しない。英語教育界では、場面即応式の会話教育は、ハンバーガー英語と言って、ハンバーガーを注文する時にしか使えない、応用力のつかない教育法として批判されている。場面即応式の内容では、応用力へと発展させることができないからである<sup>17)</sup>。それよりも、より高度な実践力を習得するのに必要な、応用力へと発展するしっかりした基礎力の指導を主眼とした教育をすべきである。では基礎力とは何か。基礎力とは、基礎学力と基礎技術力であり、具体的には発音、文法知識、読解力、音読力、語義・語感、語彙運用力、作文力である。基礎力は、基礎であるがゆえに、応用力へと発展するものでなくてはならない。そして初級、中級、上級と、それぞれの段階における基礎力である。

## 中国語養成の要 発音

中国語は発音が難しい。中国語教育・学習は、発音に始まり、発音に終わると言ってよい。上級段階の学習者の音読であっても聴いても解らないという発音は珍しくないし、母音が不明瞭だったり、声調が不安定の者も少なくない。「発音よければ半ばよし」(お茶ノ水女子大学・相原茂教授)とか、更に一歩進めて「発音よければすべてよし」(関西大学・日下亘教

授)と言われる所以である<sup>18)</sup>。

中国語の音節は「声母+韻母」の整然とした体系を持っている。そして韻母のところに声調があるので、先ずいちばんに大事なことは、母音を習得することである。単母音は六つ。数からすると少ないので、一見やさしいようであるが、母音は単母音であっても一定の長さを持っており、しかも一音節一形態素であるから、音節単位の発音は非常に重要である。しかも中国語には子音連続がないので、意味の表現はそれだけ母音にかかっている。母音が少しあまいなために、聴いても解らないという原因はここにある。母音は声調以上に重要なのである。母音の練習が基本練習として欠かせない理由はここにある。母音は、口の形だけでなく、自分でも確認のしにくい舌の位置、つまり舌尖の位置や舌根の位置で決まる。また口の形と言っても、鏡を見て解るという簡単なものでは決してない。口の引き具合や唇の丸め具合など、他者から指摘を受けなければ、本人は気が付かないのが普通である。外国語の発音を正しく聴き分け、正しく発音するには、音声学の基本的な知識が役に立つ<sup>19)</sup>所以であり、その知識のある教員の説明指導が必要とされる所以である。口の丸めの不十分さや、舌の位置のズレなど、音声学の知識があれば学生の音声を耳で聴くだけで解るし、学生が修正しやすい適切な指導ができるのである。

中国語で発音指導を重視するのは、もちろん発音が難しいことと、発音が正しくなければ、当方の言うことが相手に通じないからである。しかしこれは当たり前のことで最低の理由である。発音の重要性は他にある。「はじめに」で1年生の実情を紹介したように、発音を習得すれば、単語を覚えるのも、文章を暗記するのも早くなる上に、目には見えない形で、読解力にも作文力にも影響がある。発音の習得は、語学力の上達を早める効果と、質の高い語学力を習得する効果がある。発音の習得は語学力上達の前提となっており、中国語学習の出発点であると同時に、卒業段階でもあると言えよう<sup>20)</sup>。

## 基礎力の養成(1) 読解と文法

自然習得をする母語と違って、大学での外国語の教育・学習は、計画的、段階的、系統的、効率的に教育をするから、先ず発音から始まって、次に読解・文法に進む。

新しく外国語を学ぶには、その外国語をインプットしなければならない。インプットする方法は、耳から入れる音声言語と、目から入れる文字言語の二通りがある。外国語を習得する目的で学ぶ場合は、文字と音声で同時にインプットするのがよい。特に中国語の文字は表意文字であるから、目で見て文字と発音と意味を一体として確認しながら習得しなければならない面がある。そして、それと並行して、文字を離れて音声だけの練習を取り入れながら、徐々に習得していくのが理想であろう。

音読は聴き取りの力の向上にも役に立つ<sup>21)</sup>。文字言語は目で見るから客観性が強く、確実に理解習得できる。学習によって習得する言語は、単にものまねで覚えるのではなく、理解しながら身に付けていくものなので、文字言語により読解力を養う学習が効率がよい。今までにも繰り返し述べたことであるが、言語の四技能のうち、最も短時間で、最も高いレベルに到達できるのは、読解力である。読解力はまた既述のように聴解力の基盤でもある。発音の次に読解力を外国語教育の優先順位に置くのは、理に適っているのである。なお、文法訳読中心は母語からの転移が起りやすいという指摘がある<sup>22)</sup>が、これをなるべく解消する方法が音読重視の教育・学習である。

## 基礎力の養成(2) 音読力

中国語インテンシブ教育は、その目的も目標も実践運用能力の養成にある。とすれば、ある程度難かしくかつ長い中国語の文章が、一定程度にはスラスラと声を出して言えなくてはならない。つかえつかえで相手が



退屈したり、苦しそうな顔をしてじっと我慢をしながら聴くようでは、実践力があるとは到底言えない。これを解消する教育・学習が音読力の養成である。

中国語は発音の難しい言語である。音節や単語単位の発音を習得していても、文や文章になると、途端に母音や声調が乱れてしまう。上級段階に進んでも、しどろもどろで聴くに堪えない読みも決して珍しくない。それが中国語教育界の偽ざる実情である。加えて中国語の文字は表意文字である。会話力の養成には、どのような文章にあっても、ある程度はスラスラ音読できる能力が必要である。

音読力の養成は、初級段階での大きなはっきりした声での音読力の基礎の上に、中級段階、上級段階において先ず内容のあるしっかりした文章がスラスラ読めるようにすることである。それには普通の速さで録音してある録音教材でシャドウイングをするのがよい。そしてそれと並行して、早読み練習が効果がある。つまり、ある文章に時間を設定し、その時間内に読む練習である。この狙いは三つある。

一つはもちろん会話力である。内容のある長い文をスラスラ言えるようにする練習は、シャドウイングと早読みが最も適している。シャドウイングは、速さ、抑揚、強弱、ポーズ、感情表現など、自然な読みができるようになる。早読みは録音を離れて練習するので、借り物ではない自分の音読力造りになる。だから、どんな文章でもシャドウイングと早読みができるようにすれば、かなりの会話力の基礎が身に付くであろう。

もう一つの効用は、クセの付いた発音を矯正することができることである。早読み練習法は、筆者が学生時代から試みている発音練習であるが、個別の指導では矯正できなかった発音が、早読み練習でよくなることである。一般には、早く読めば発音が乱れるように思いがちであるが、中国語の場合はそうではない。原因はよく解らないのであるが、中国語は声調言語であること、いい文章は口調がいいことと関係があるのかも知れない。実際多数の学生が早読みによってクセのついた発音を矯正することに成功

しているのである。早読み練習は、自分で時間を計りながらできるだけでなく、練習によって音読にかかった時間が短くなるので、進歩の具合が自分で判断でき、それを励みにできるという利点がある。

早読みには今ひとつの効用がある。文法・読解は、中国語を正しく理解するための必要不可欠の教育・学習方法である。しかし上述のように、母語からの転移が起りやすいのも読解学習である。この転移を解消する最もよい学習方法のひとつが音読、特に早読みである<sup>23)</sup>。早読みは無視できない中国語習得の基本的かつ重要な学習方法と言えよう。この音読、早読みの教材は、当然のことながら中国語の表音文字であるピンインを附してない漢字だけの文章である<sup>24)</sup>。

ここで一言補足しておこう。外国語の教育・学習には、単語や文体また内容など、やさしいところから段々と難しいものへと進んでいく教育・学習と、単語の基本義や用法の発展、類似表現によるニュアンスの違いなど、語感に磨きをかける面と、耳慣らしや口慣らしのように、練習量による慣れ不慣れのものがある。この区別をきちんとしておかないと、教育方法に間違った評価を下すことになる。大学教育、特にインテンシブ教育のような明確な到達目標を持ったプログラムでは、安易に目先の効果を狙うのではなく、応用力へと発展する基礎力造りに重点を置くべきで、前二者に重点を置き、後者は時間の許す範囲で手ほどきをすべきであろう。

会話力のある人や、実践力の向上を目指して努力をしている人は誰でもそうであるが、会話力が向上すればするほど発音、音読力習得の重要性が身に染みて解るのである。インテンシブ教育の早読みでは、並足よりもやや早めの無理のないところで時間設定をし、練習方法と、以後の学習の方向を学生自ら掴むことができるようにするのも目的としている<sup>25)</sup>。

### 基礎力の養成(3) 作文力

外国語の力を見るには作文を見れば分る、と言われているように、外国

語を習得する上で作文練習は欠かすことのできない指導項目である。文字で表された言語はごまかしがきかないばかりでなく、最も重要な文の流れおよび表現法やニュアンスの表し方など、細かなところまではっきりと出てくる。だから文字言語による練習は、やり方次第で大きな効果がある。しかし、作文ほど指導の難しい教育項目もない。作文教育の狙いは次の3点である。

1. 正しい中国語が再生できる力を付ける。
2. 自然な中国語が生産できる力を付ける。
3. ニュアンス表現まで含めた表現を習得する。

日本語には日本語の論理があり、中国語には中国語の文の流れがある。作文練習の狙いは日本語的な感覚や論理から脱却して、中国語らしい感覚や文の流れを身に付けることである。したがって、作文指導最大の狙いであり、かつ教育指導において最も意を尽くすのは「2」である。日本語を中国語に訳す練習では、どんなに文法的に正しい文でも、日本語的な表現から完全に脱却することは難しく、文章が長くなるにつれてそれが明確に出てくる。日本語に訳しやすい中国語であっても、中国人には通じない中国語になってしまうのである。だから作文指導ほど難しいものはなく、日本人教師では荷が重過ぎる。と言うより不可能である。そこでインテンシブ教育で実施しているのが、先ず日本人教師による反訳と“黙写”で作文力の基礎を作り、その後で中国人教師の指導によるモデル文による模倣作文の添削と暗唱、次に自由作文の添削と暗唱で、作文力を付けるという段階を追った手順である。作文指導でここまですれば、学校教育としては十分であると言える。作文学習は、インプットをして習得した語学力ではなく、中国語を自分で創造生産して身に付けた語学力だから、容易に崩れることがない。留学学習で徹底できないのが、発音と精読と作文である。この三つの項目をしっかりと学習すれば、相当高度な中国語の総合力を身に付けることが可能である。自由作文の指導は学校教育の仕上げ段階と言ってよいであろう。

ここで暗誦と反訳および“黙写”の違いについて一言触れておこう。今までの外国語学習には、暗誦が奨励されていた。しかし、正直言って、暗誦では応用力へと発展しない。結局丸暗記(“死記”)に終わってしまう。これに比べ反訳は暗誦よりも早く確実に覚えることができる上に、応用力へと発展する。それは筆者自身の経験だけでなく、反訳学習を経験した学生が言っていることである<sup>26)</sup>。“黙写<sup>27)</sup>”は反訳から日本語を取り去るので、中国語の思考回路を作るにはいっそう効果がある。反訳、“黙写”については、当然のことながら、学生の負担が増えないように、学生が学習しやすくなるように、音読、早読みを兼ねて、授業時間中にかなりの時間を割いて練習をしている。語学研修など、上級生と下級生が顔を会わせた場で、“黙写”学習を経験した学生が下級生に対して「“黙写”は実力がつくよ。」と励ましていたのを聞いたことがあるが、その言い方には実感がこもっていた。経験をした学生自身が学習効果を認識すれば、この学習方法はやがて学生の中に浸透し、定着するであろう。中級段階の“黙写”が非常に大事で、今までの経験を踏まえて、現在学生の実態に合った内容と難易度の教材(より実践性と生産性の高い内容の教材)を開発中である。

## 実践力の養成(1) 海外語学研修

正規の授業は、基礎力の養成が中心である。実践力は自分の努力で習得するのが普通であるが、県大ではそれを大学として支援する体制をとっている。

海外語学研修は、今でこそどこの大学でも実施しているが、県大は長い伝統を持っており、実施の内容も経験を積み重ねることにより、単に会話実践力向上に止まらず、異文化コミュニケーションの体験を通して、自己の自覚や自立心の涵養、積極的な行動力、問題意識の発展などが自覚できるように、個々人が主体性を持って体験できるような形態を採っている。これは担当者によるアドバイスと方向付けが非常に大事な役割を果たすこと

になる。就職後のコミュニケーション能力が問題になって久しい<sup>28)</sup>が、インテンシブクラスの学生は、異文化コミュニケーションで仕事をするから、特にこの点が大事で、現地研修の意義はここにあると言ってよい。これを担当者がどのように認識し、どのように指導をするか、現地研修の成否はひとえにここにかかっていると言っても過言ではない。「楽しかった。少し話せるようになった。」というだけでは、旅行社の斡旋する語学研修と何ら変わるところがない。インテンシブクラスの語学研修とは言えないのである。研修を通して、考え方が変わり、行動が変わり、人によっては葛藤が始まるほどの強い刺激を受けるのが、現地での語学研修である。

現地で学習をすれば会話ができるようになる。そう思うのが普通であろう。しかし会話は常用句であっても、思うほど簡単には聴いても解らないし、口からも出てこない。現地にいるだけでは向上は望めないのである。現地研修をより効果のある研修にするには、現地に行く前に、日本でどれだけ学習方法と学習姿勢および実力を付けているかによる。わずか1ヶ月で実力の向上（難易度を高くする、という意味で）など望めるはずはない。現地では、聴く耳を慣らすことと、声を出して話す口を慣らすことを主体とするのが現実的で効果も高い。だから日本での学習が重要な意味を持つてくるのである。そこで2010年度から、2年生以上にも留学生による補助指導をすることとし、聴き取りの授業を実施したのであるが、果たして聴き取りの効果ははっきりと出ていた<sup>29)</sup>。聴き取りができれば、その分授業時間を話す練習に使うことができる。2010年度の語学研修は、新しい方向が見えてきたことが大きな意味があった。

語学研修は、連日午前中中国語のみで授業が進む。このような経験は学生にとって初めてである。耳が慣れない間は聴いても解らず、かなりの緊張感があり、疲れもする。これが少しでも解消されれば、その分効果がある。事前研修の意義は十分あると言ってよい。

語学研修については、すでに筆者の考えを内部資料として大学に提出しているが、ここでそれを簡単にまとめておこう。

語学研修の意義は二つある。

1. 中国語の集中授業——実践力の向上
2. 自主実践——異文化間コミュニケーションの体験

授業は月曜日から金曜日まで毎日午前中にある。この目的は実践力の養成であるから、難易度の高い教材でのレベルアップを図るのではない。今まで習得した中国語を基に、現地における実践的内容の教材で、耳慣らし、口慣らしを主眼とする指導である。授業は当然すべて中国語で進む。

自主実践の意味はいろいろある。まず、第一の意義は言うまでもなく、異文化体験、異文化間コミュニケーション体験である。その効果を具体例でみることにしよう。

第一回目の出来事である。上海到着後は福州から出迎えの外事処の人の案内で市内見学をしたが、二日目の午後は休んで下さいとのことであった。それで自分たちだけで出ることにし、昼食後に大学正門前のバス停で待ち合わせることにしていた。バスに乗った後になって二人の男子学生が乗っていないことに気が付き、引き返そうかと思ったが、二人がバスに乗ることができれば帰って来ることもできる、との判断で、そのまま自分たちだけで行くことにした。夕方6時の夕食に帰ることにしていたが、その二人は6時を過ぎても帰ってこない。どうしたものかと思っていると20分頃になって、喜びに満ちた顔付きで元気よく走って帰って来た。聞けば、大学に帰ろうとバスに乗ろうとしたらボタンとドアを閉められた。仕方なくタクシー乗り場に行った(当時はまだ流しのタクシーはなかった)が、同じように乗車拒否にあった。着ているランニングシャツを引っ張りながら何かまくし立てられた。どうもランニングシャツがいけないらしい(後で解ったことは、ランニングシャツは下着とみなされる)。どうしたらよいか途方にくれていたが、ポケットから宿泊している大学学生寮の鍵を出して見せると、「留学生か。」と言って乗せてくれたそうである。日頃からおとなしく、無口で中国語もいちばん苦手な二人で、筆者がいちばん心配していたのがこの二人であった。ところがこの経験を経てからは、次の都

市へ行っても、真っ先に「カバンを買ってきます。」「～をして来ます。」と言って、勢いよく出かけるのである。その姿を見て、「もっと学生を信頼してやらなくては。」という思いが湧いてきたのは、筆者の収穫であった。語学研修実施の最初の年で、しかも始まったばかりの時点でこのような経験を持ったことは、自由行動のあり方を考える上で、筆者にとっても、学生にとっても非常にいい経験であった。自分で直接経験することほど貴重で効果のあるものはない。その後はいつもこの時のことを念頭にアドバイスをすることになっている。第2回目からは、上海到着後に銀行で両替をした後「上海の地図か絵葉書など、何でもいから夕方帰ってくるまでに何か一つ買うように。」と言って自由行動に移っていた。翌日からは朝食後さっそく自由行動である。出かける時は緊張していた学生たちも、夕食時に帰って来た時は、生き生きと輝いて大きな声が食卓を飛び交う。三日目からは、朝食後、気が付いた時にはもう学生の姿はない。これが後年「自由行動」から「自主実践」へと名称を変え、その意義付けをした原点である。ある年「自由行動と言えはいいのに、どうして自主実践なんてもったいぶった言い方をしているのだろう。」と思っていた学生が、1週間も経ったころ「自主実践の意味が解りました。」と自分から言っていた。帰国前にバスを乗り継ぎ、西安郊外にある始皇帝二世胡亥の陵に行き、その老人二人と2時間もの間話し込んだと、嬉しそうに話していたのを今でも思い出す。

またある年のこと、西安到着早々に有名な商店街に行き、「今日はどんな物があるか見るだけで、絶対に買わないように。」と言っておいたのであるが、二人の学生が随分と高い買い物をした。「親切でした。」「お茶を出してくれた。」とニコニコ顔である。やがて現地の生活にも慣れ、物価の感覚が解るようになると、ようやくボラれていたと悟る。帰国の前々日「明日もう一度あの商店街に行って、今度は安く買ってきます。」と張り切って言う。果たして翌日夕方帰ってきて話を聞くと、みんな筆者も驚くほど安く買っているのである。その得意そうな顔を見て、「今年の語学研

修もうまくいった。」担当教師としての疲れが消える一瞬である。団体行動や拘束の多い高校時代の語学研修を経験している学生も、「絶対に県大方式がいいです。」と言っていたのは、自主実践から得るものが多いからに他ならない。団体行動ばかりの研修に参加した学生は、「前は上海での研修だったのに、上海の地図は買った時の新しいままで研修が終了しました。今年は3日目でも早くもボロボロだからもう1枚買います。」と楽しそうである。市内散策、レストランでの食事、買い物、その他、自主実践の話題は尽きない。

今年度は出発前から心配の種が多い年であった。果して、早くも北京到着の翌日、ホテルから空港へ行くリムジンバスに3人の学生が乗らない事態が発生した。スーツケースを持ってバスの乗車口まで進んだのであるが、乗ろうとしない。「早く乗れ！」と何度も号令し、命令したのであるが、他の客が横からどんどん乗るのをボーッと傍観しているだけで、動こうともしない。発車の案内があったので、慌てて大声で「タクシーで来い。行き先は“国内線、2号楼”」と中国語で2回言って復唱させた時点でバスが出た。バスの中では、3人が間に合わなかった場合のことを想定して、あらゆる方策を考えめぐらした。西安からの帰途も、上海空港から大学の宿舎までタクシー3台に分乗したが、その時も2人の学生がタクシーのペテンに引っかかり、料金を支払った後に別の口実でかなりの額を取られたのである。西安に滞在中の研修では、マナー、授業への取り組み姿勢、部屋の使い方など問題続出であった。中国人の先生と正門での約束時間にかなり遅れているのにも拘らず、ベチャクチャ話しながらのんびりと歩いている。それを注意しても馬耳東風。信じられないような光景はこれだけではない。帰国後の反応も例年とは全く違っていた。いつもは研修に参加した学生は、授業中前の方に座り積極的になる。ところが今年はその逆で、後ろに移動し欠席も多い。学生に何かが起こっている——しばらく様子を見て、対応の仕方にめどが立った頃話してみると、果して想像通りであった。今までの自分が如何に独り善がりな狭い世界で自己満足をしてい



たか。それが解ったのであるが、どうしていいか解らず胸のあたりがモヤモヤしていると、手を振り顔を歪めて話すのである。

「もう一度一人で中国に行きなさい。このまま日本にいてもこの状態が続くだけで、解決しないから。」

「自分もそう思っています。みんなでまた中国に行こうと話しています。西安と上海に行きます。」

「みんなで行っても効果はない。一人がいい。西安も上海も勝手知った馴染みのある町だから、行っていない町がいい。一人で行けるはずだが。」

「ハイ、大丈夫です。一人で行けます。」

と、迷いのない力強い返事である。ゼミの先生からは、当学生が「元気が出てきた。変わった。」との声が届いている。またあるゼミの先生からは、中国語インテンシブクラスの学生が、卒論で中国の環境問題をテーマにしたとの相談があり、いろいろとアドバイスをした。そしてアモイに調査に行くことにしたが、当学生は一人で行くと言い切っているという話を聞いた。その仲間の一人である。中国語の文献を翻訳するだけでなく、インタビューも予定しているそうである。この学生に見るような自立心と主体性の上に立ってこそ、語学力は生きてくる。暖簾に腕押し之感が強く、評価判断に苦しんでいた今年度の語学研修も、ここにきてようやく胸のつかえをおろすことができた。このように、学生たち一人一人の実例が語学研修の意義と効果を雄弁に物語っている。

自主実践は、従来は異文化体験、異文化コミュニケーション体験が狙いであったが、時代とともに学生の傾向も変わり、語学教育およびそれと関連した指導だけではすまされなくなっている。仲間同士ではごく普通の話し方や振る舞いでも、第三者、特に外国人にとっては極めて失礼な言い方や態度も少なくない。そこに気が付き配慮をする気配りの養成も大事である。日本では聞き流したり、些細なことだと思ったり、反発を感じるような助言も、異文化の中に身を置くと、自分の至らなさや間違いがよく解る。「どうして日本人の学生は勉強をしないのですか。」という中国人学生の

質問にも、素直に耳を傾けて自問自答する。マナー、行動力、自立心、積極性、知的好奇心、他者の目で自分を見る視点、問題意識…… 受身志向が年々強くなっている今日、語学研修で学ぶものは多い。

最後に期間と場所について補足しておこう。

期間は1ヵ月が適当である。他大学のほとんどがそうであるから、という訳ではない。語学力の習得状況と、場数を踏む異文化体験の量、自主実践による意識の変化、それに帰国後の学習への影響などを考えると、15日間で始まった語学研修<sup>30)</sup>の20年以上にわたって、学生たちと侵食を共にし、かつ帰国後の様子を見て得た結論である。

場所は北方。中国は国土が広く、方言差も大きい。中国語学習は共通語圏内の北方が常識である。語学研修は1ヵ月の短期集中学習である。標準音で聴いてわからないのを聴き直すのは、聴き取りの練習になる。しかし、訛りのある発音では、聴き直すのは時間のロスになる。語彙、表現も違う。語学学習段階では、ロスタイムの多い南方よりも、授業以外でも語学学習のできる北方が相応しいであろう。それに1ヵ月という期間で、自主実践の効果を重視している点からすると、ある程度以上の規模を持った都市がよい。現在西安で実施している理由はここにある。

## 実践力の養成(2) 留学生による学習補助

先ず、授業期間における、留学生による定期補助指導である。これは徹底して実践的な練習である。

1年次 週2回 1回60分

前期 イ. 中国語問答。「あなたは学生ですか。」など簡単な質問から始まって、「大学は駅から遠いですか。」など身の回りの話題で慣らし、「人口は北京が多いですか、上海が多いですか。」「中国でいちばん大きな省はどこですか。」など中国の事情などに及んでいる。この練習は、学生が質問に対して反射的に

答えることができるように、徹底して繰り返し練習している。

ロ. 会話 北京出版の中国の生活の場を取り入れた内容の教材を使用。

後期 イ. 会話 同上。

ロ. 聴き取り やさしい文章を“听写”。解らない語句を中国語で説明し、聴き取りの力だけでなく、勘を磨くことも狙っている。

2年次 聴き取り 中国の学生生活や風俗習慣など、さまざまな内容の文章を題材として、幅広い範囲での聴き取りの力を付けるのを目的としている。

3年次 聴き取り 同上。2年次使用の文章より、少し難しい文章を使用。

この補助指導は、授業期間中の実施でもあるので、学生にはプラスαの負担がかからないように、予習、復習が要らないような形で進めている。

次に春季語学研修を述べる。これは夏季の海外語学研修が1ヶ月と長く、かつ費用がかかるので、それに参加できない学生にも機会を与えようとの趣旨から始まったものである。1年生クラスと2年生以上のクラスの二クラスである。期間は12日間。内容は次の通りである。

1年次 イ. 聴き取り やさしい文章を“听写”。解らない語句を中国語で説明し、勘を磨くことを狙っている。

ロ. 文法 初級で重要でありながら教科書に取り上げてない項目、および複文。単に文法学習ではなく、当該文法項目の例文を使用して、日本語訳、聴き取り、作文と、その項目を会話で使用できるようになる練習を兼ねている。

2・3年次 イ. 聴き取り 中国に関係ある内容の文章を使用。

ロ. 文法 語順の違いにより意味に違いが生じる例文を用いて、語順の重要性を認識し、語感を磨く。

幅広い抽象義を持つ結果補語を題材に、基本義を考え、意味の広がりを含み、語感を磨く。

留学生の聴き取り授業は、定期補助指導よりも内容的に幅が広く、レベルも高い教材で聴き取りの力を付け、専任教員の文法授業は、正規の授業ではできないが、高度な実践力が身に付く、原理的な知識習得を主眼とした授業である。狭い範囲ではあるが、中国語全般にわたって通じる中国語の特徴を理解する上で非常に有益な内容である。

## AO入試、オープンキャンパスと広報活動

AO入試は、大学が求める人材と、高校生が望む教育目標や内容の合致したところで選考される入試制度である。明白な目的と目標を掲げている中国語インテンシブプログラムにとって、AO入試は極めて有用な人材確保の手段である。

AO入試を始めてから今年で4年目を迎えたが、当初は中国語インテンシブプログラム開設の趣旨や教育方針、教育内容などが十分に高校生に伝わっていなかったために、受験生がそれぞれ自分の持つ中国語教育に期待をしてすれ違いが生じることもあった。現に高校からは「AO入試は非常に有り難いのですが、インテンシブコースのPRが不足しているように感じます。」「大学側のアピールが弱い。高校生に対する募集の積極性が感じられない。」「中国語等の外国語にも力を入れていると聞いているが、あまり目に見えない。」などの要望や意見が出されたことがある<sup>31)</sup>。22年度の受験生(現1年生)からは、入試要項に中国語インテンシブプログラムの内容をある程度紹介したため、受験の志望理由などから、それに反応を見せるようになってきたことが窺える。現に今の1年生は、AO入試入学者全員が、ほぼクラスの中心的存在になっていると言ってよい。入試における面接を、集団討論から個別面接に切り替えたのも、本人の自覚を促し、より強く認識を持たせる上で効果があったと思われる。

なお、AO入試で課題図書の要約を課し、入学前指導でも課題図書の要約を課すのは、入学前に読書力と作文力を付け、読解力および作文力の習得を目指した、中級からの本格的な中国語学習に備えるためである。

オープンキャンパスは、高校生および高校の教員に直接広報活動ができる場として、貴重な30分である。当初は当然ながら実績もなかったことで、担当教員による説明のみで、本学の中国語インテンシブプログラムは他大学と違った特色があるので、本学の中国語教育の方針とその趣旨および内容を理解してもらうのが眼目であった。現在では、段々と学生も本プログラムの主旨を理解し、かつ実践的な語学力を付けている者も増えているので、今年度は1年生3人、3年生1人により、インテンシブ学習の経験を通して、学生の視点からみた中国語インテンシブ教育を紹介し、授業や留学生による補助指導の一端を実演した。オープンキャンパスに参加した高校生が、この学生の実演に刺激を受けたことが、23年度のAO入試の受験生の志望理由書によって知ることができる。

このように見てくると、中国語インテンシブプログラムの実態に沿った広報活動が、如何に効果があるかが明白であろう。高校訪問をした時に、中国語インテンシブプログラムについて質問を受けたとの報告を複数の専任教員から受けている。いずれも県外の高校であるが、少なくとも、県内の高校には地域に根ざした大学造りの一手段として、また安定した人材の確保のために、十分な理解と認識を持ってもらうべく、積極的に対応すべきであろう。1年遅くなれば、それだけ軌道に乗るのが遅くなる。広報活動は一時も早い方がよい。

## 終わりに当たって

第一期の6年間は、準備期間が十分になかったために、教材の準備すら間に合わないままにスタートしたり、大学が独立法人となったのと同時であったため、担当者と大学の関係や位置付けが明確に認識されていなかっ

たり、学生の中にインテンシブ教育の主旨が十分に伝わっていなかったりで、予期せぬ事態に陥ったこともしばしばであった。初級教育が一定のレベルに達し、安定してきたのは3年目で、4年目からようやく授業・教育のエネルギーを中級に移すことができるようになった。そのような中で、ある程度の実績を積むことができ、今後進むべき方向が見えてきたことは大きい。小さい頃からゲームと受験対策の勉強で育ち、断片的な詰め込み教育で思考力も付かず、反復練習という簡単な基礎学習の仕方さえ知らず、対人関係も育っていない現代の大学生たちを前にして、担当者と大学が、語学教育以外でも理解・協力をしながら解決すべき問題も多い。そのような協力大勢が軌道に乗り出した時が、インテンシブ教育が全体的に安定して軌道に乗る時であるのかも知れない<sup>32)</sup>。

## 注)

- 1) 特任教員高芳先生談。
- 2) この点一つとっても、ネイティブスピーカー教員の発音教育指導が、如何に有益で重要であるかが理解できよう。
- 3) 拙著「中国語インテンシブコースの構想」(『学長裁量教育研究論文・報告集』所収) 平成19年(2007年)5月
- 4) 「長崎県立大学について県内高等学校の教員から寄せられた意見」平成21年7月7日 教育研究協議会資料
- 5) 外国語の教育は、初級、中級が所謂語学教育で、上級は小説や新聞の講読など、テキスト用の中国語ではなく、生の文章を教材として使用する教育・学習である。初級は、基本的な語学知識や技術力養成の段階で、謂わば、準備運動、助走の段階である。中級は、高度で幅の広い、しっかりした基礎力養成、基礎力固めと、応用力へと発展する段階で、いよいよ確実に実力を身に付けようとする目標を見据えて本格的に走り出す段階である。中国で出版されている外国人用中国語のテキストを見ても、それははっきりと反映されていて、中級用のテキストは、内容、構成、分量ともに非常に充実している。教育体制に反映された例

をみると、ある重点大学では、優秀な教師を中級クラスに集めているという（本学留学経験者談）。当大学では、大学として語学教育に優れた識見を持って留学生教育をしていることが窺える。

- 6) 『外国語学習の科学』白井恭弘 岩波新書 2008年 p.16  
この点については「スピーキング重視の問題点」として指摘されている。
- 7) 当時中国ではまだ中国語を学習する外国人を受け入れる体制が整っておらず、個人的に知人を通して、講座の開設を依頼するのが普通であった。二人の中国語担当者と相談したが、二人とも中国語学習に相応しい北方の大学には知人がおらず、南方だけであった。詳しい情報がないままでの計画であったので、教員養成の師範大学なら、教授法も優れているであろうとの判断であった。果たして実際に授業が始まってみると、教え方は当初の予想をはるかに超えた、非常に満足すべき授業であり、教授法や説明の仕方など筆者自身参考になるところ大であった。その時に受けた教室での第一印象の光景は、今でもはっきりと脳裏に浮かんでくる。ただ一つ残念なことは、一歩外へ出ると、そこには訛りの強い中国語が待ち構えており、教師でさえ聴き取るには非常に苦勞を伴うのである。これではせっかくいろいろな場面で実践力を養おうと期待しても、それは無理である。現地研修の意味が授業だけに終わってしまうのである。後年北方の大学と縁ができた時に、福建師範大学には感謝しつつ、後ろ髪を引かれる思いで研修地方を移したのである。
- 8) 『慶応湘南藤沢キャンパス・外国語教育への挑戦』関口一郎 編著 三修社 1993年 P.19
- 9) 「中国語で活躍する卒業生」（『中国語インテンシブプログラム紹介』高校生向け説明書）参照。
- 10) 『週刊ダイヤモンド』2011.1.8 p.26
- 11) 筆者の体験を二つ紹介しておこう。いずれも提携校である華僑大学とのコミュニケーション体験である。一つは電話で、一つはファックスで、本学の華僑大学に対する対応に対して、言語表現の辞書的意味では全く読み取れない文面（一つは、本学から派遣が決まった留学生に対する待遇改善の申し出、一つは、両学提携に功勞のあった元学長への謝辞を兼ねた病氣見舞いと、健康回復後の講演依頼である）で、婉曲的に要望が申し出されたのであるが、筆者が関係者に説明をしても、先方の真意を理解されないものもあった。その他、筆者の個人

的な経験は、枚挙にいとまがない。

12) 『週刊ダイヤモンド』 同上 p.34 村上憲郎氏 (グーグル名誉会長)

私がまだ英語を話せなかった30年前、外資系企業が毎年世界中から従業員や取引先を集めて開催する全体会議では、英語圏以外の参加者たちの多くは同時通訳サービスを利用していた。30年後の現在、同じシーンで同時通訳のイヤホンをつけているのは日本人くらいだ。会議の懇親会でも日本人同士で固まってしまう。(中略) 他のアジア地域からの参加者が英語に対応してもなお変わらぬ日本人の姿はまるで、ゆでガエル。非常に危機感を覚える。

13) 『英語教育はなぜ間違えるのか』 山田雄一郎著 ちくま新書 2005年 p.218

学校教育だけで、英語が実用的なレベルに達することはない。いくら力んでみても、週三度や四度の授業だけで英語が話せるようになるなどありえないことである。(中略) 英語は、日本社会の言語ではない。だから、教室で学んだ英語を生活の言語にするのは、どこまでも個人の問題である。これまでも、英語を自分の生活や仕事で必要とする人は、学校で習い覚えた英語に磨きをかけ、自分の目的に応じた生活の英語に仕立てていた。(中略) いま世間は、教育の英語を生活の英語と同義に解釈しているところがある。これは、間違いである。

同時に、英語を実用的なレベルに高めるためには、週三度か四度の授業があれば十分である。学ぶ側にしっかりした動機と継続的な努力があれば、現在の制度のままでも十分な成果を期待することができる。(中略) 英語学習を教師任せ、学校任せにするだけでは、学習は進まない。習ったことを次々に置き忘れていくだけである。英語学習は、取り組むべきものである。(中略) 言語は、教えてもらうものではなく、学びとるものである。

この山田氏の本は、中学校や高等学校の教育現場を対象として書かれたものであるが、大学では、教育目的や授業時間数によって多少の幅が出てくるだけで、教育方針や教育姿勢など、基本的なところは違いがない。学習者のあるべき姿勢は、むしろいっそうの主体性を持った学習態度が求められるであろう。

14) かつてインテンシブクラスの学生が2年生も終わりに近くなった頃、「会話では応用力がつかないです。」と言っていたが、インテンシブクラスのいろいろな科目を受講しての実感であろう。この点が理解できるようになると、学習に対する意識が変わり、学習の重点の置き方が変わり、最終的には却って会話力



も向上しよう。

- 15) インテンシブ教育とは関係ないが、この機会を利用して、外国語教育についてここで筆者の持論を述べておこう。外国語教育に欠かせないのはネイティブスピーカーの教師であるが、最も効果的な授業形態は、現地で日本人教師による入門から始めることである。初歩の段階ほど日本人教師を多く配置し、上級になるにしたがってネイティブスピーカーを多くするのである。ただし、最終段階でも日本人教師は一人は配置し、精読を担当する。これが最も効率よく、確実に、かつ高度なレベルに到達できる授業形態である。
- 16) 日本人教師としてこれに代わりうる教育方法は「听写」である。中国語の場合「听写」は非常に効果のある方法で、週1回これを4年間続ければ、かなりの聴力が付く。それでも中国人教師による自由な話に比べれば、話の内容の豊富さ、話すスピード、同じ時間内でインプットできる中国語の分量など、効果は遠く及ばない。「听写」が中国人教師によるある話題の下での話よりも効果があるのは、聴いた中国語を書くので、一字一句その単語の漢字や意味を確認できることと、語句の説明を中国語で受けるから、関連した語彙や表現法を増やしたり、語感を磨くことにある。また中国語は多音節語が多いので、未学習の単語でも、勘が働いて解るようになる率が高くなる。
- 17) 誤解を解くために一言補足すれば、場面に即した会話文が即だめであるという意味ではない。場面に結び付かない文こそ運用できないからである。その文を用いて拡大応用できるのが重要で、その場面でしか使えないような文は生産性がない、という意味である。教科書で提示する文や例文は、なるべく基本的かつ応用性や発展性が高いほどよい。
- 18) 『中国語の発音』 日下恒夫著 アルク 2007年 p.3
- 19) 『外国語上達法』 千野栄一著 岩波新書 1986年 p.157
- 20) 拙著「中国語教育における発音教育と古典の解釈—李白「客中行」と『山中与幽人对酌』を題材として—」(『長崎県立大学論集』第40巻第4号所収) 参照。  
またこれは中国語だけの問題ではない。英語教育の専門家からも指摘されていることである。

山田雄一郎著 上掲書 p.225

上手な発音は全体とも関係があるから、発音だけが上手になるということ  
は起こらない。

このことは、発音がうまくなれば読解力も作文力も自動的に向上するという意味ではない。読解は読解で、作文は作文で学習をしなければならないことはもちろんである。相乗効果ではないが、発音がうまくなれば、音読時のリズムの取り方や、切り方、ポーズの取り方、抑揚などで読解にプラスの影響があるし、いい文章はリズムがいいから、音読力があればそれだけいい文章が書けるようになる。実際意味の解らない文に出会った時に声を出して読んで解ることがしばしばあるのは筆者だけではない。

- 21) 英語教育界では夙に言われていたことである。本学の例を紹介しよう。インテンシブクラスに、中国語は好きだと言いながらも、授業の時はいつも列のいちばん後ろに座り、音読練習の時には口を動かさず、声も聴き取れないほど小さな学生がいた。2年生になった時に非常に張り切って、授業が始まる前に新任の中国人教師の研究室に伺い、授業が始まるのを楽しみにしていた。ところが最初の授業が終わった後に筆者のところにやって来て、「授業は全部中国語でした。みんなとこんなに差がついているとは思いませんでした。」と、かなりショックを受けていた。その時筆者は、上述のことをその原因として話したのである。
- 22) 白井恭弘著 上掲書 p.16
- 23) 母語転移を解消し、さらに中国語の思考回路を構築する学習方法としては、音読の他に、初級段階の反訳および中級以上での「黙写」がある。
- 24) 中国語の教育・学習上の最大のネックがピンインの問題であるといつてよい。それは上級の教科書ですら本文にピンインが附してあることから明かであろう。ピンインから如何に脱却するか。教育・学習上最大の課題と言えよう。本学では入門期の発音教育を終えた段階から漢字だけの文、文章で教育をしており、学生の意識でもすでにピンインがない方がよいとの認識が定着している。中国語教育学会でも発表し、一定の反響を呼んでいる。ピンインを附してない教材での教育・学習の効果を、学生の意見を含めて挙げると、
- イ. 発音がよくなる。
  - ロ. 漢字と発音と意味が結び付く。
  - ハ. 文法を考えるようになり、文章の意味内容が理解しやすい。
- ニ. 単語が覚えやすい。
- 25) 高校時代に中国語検定試験三級を合格し、入学後も一貫してトップレベルを維

持っていた学生が、3年間のインテンシブ教育を終え、留学を前にして「早読み練習はいいですねえ。」と自らの中国語学習を述懐していた。

- 26) 他大学の例を紹介しよう。福岡の大学で英語の再履修クラスを担当しておられる先生から、学生が勉強をしないのでどうしたらよいか、相談を受けたことがあるが、その時たまたま採点をすませた反訳試験の答案用紙を持っていたので、それをお見せして説明をした。四月の新学期が始まって、先生にお会いたした時に、「反訳はいいですねえ。学生が、これなら英語が使えるようになる、と言って積極的に勉強するようになりました。」と言って、筆者を大学から駅まで自家用車で送って下さった。また関西の大学では、第二外国語の2年生で反訳を取り入れている先生から、中国語の語感が出てきて、中国語が勉強しやすくなった、学生からは「考えさせる授業」と評価されているとの情報が届いている。
- 27) 『英語力が飛躍するレッスン』今井康人著 2009年 青灯社  
“黙写”は高校の英語の授業でも活用されている。本書は、文部科学省より「コミュニケーション・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール」(SECHi)の指定を受けている北海道函館中部高等学校の英語教育を紹介したもので、音読と暗写(“黙写”)に重点を置いた授業の効果について述べてある。著者の今井教諭は、いろいろな教授法を試みた結果到達したのが暗写であるという。暗写という名称自体今井教諭の命名である。暗誦が暗記して朗誦する意であれば、暗記して書写するのを暗写または暗書という言い方は相応しいと思う。“黙写”は中国語であり、筆者は中国式教育法を模倣しているに過ぎない。日本語の呼称は、この教育法を独自に開発された今井教諭に帰するのが筋であろう。
- 28) 会社の人事担当者によれば、筆者の「どのような学生を望むか。」という質問に対し、かつてはいくつかの条件が出されたが、今では「どんな学生でもいいです。教育は入社してからします。」という答えである。条件を求めても、その条件を備えている人材がないということである。外国語でコミュニケーションをとる人材養成のインテンシブ教育は、ここまで念頭に入れておかなければならない。
- 29) これまでは、授業が始まってから最初の数日間は先生の中国語が聴いても解らず、時間が経つのが驚くほど遅く感じ、成績のよい学生ですら日本に帰りたいと思っていた。ところが今年は、聴き取りは初日から3割か4割解ったそうで、

みんな最初から時間が経つのが早いと感じていた。

- 30) 期間を15日間から始めることにしたのは、当時の事務局長の助言による。流通学科開設の記念パーティーの席上、県学事課の担当者3名の方から真っ先に「語学研修は大変意義があります。大変でしょうがもう少し頑張ってください。私たちも頑張っていますので。」と思わぬ激励を受けたこともある。
- 31) 「長崎県立大学について県内高等学校の教員から寄せられた意見」上掲資料
- 32) 中国語インテンシブプログラムでは、中国語習得の検証手段として、中国語検定試験が利用されている。これは、外部試験による客観的評価が求められていること、誰でも利用しやすい条件が備わっていること、この2点から選択された結果である。検定試験は、他の類似の試験同様、必ずしも学力を反映できるものではないという批判もあるが、自分が学習した教材以外の題材からの出題である点、どの程度力が付いたかを見ることができる面があるもの事実である。もちろん、四つの選択肢より正解を選ぶという形式は、出題形式や重要な出題項目また出題内容を大きく制限するものであり、かつ解答者が生産するものが何もないので、学力を問う問題を作成することはかなり難しい、という問題もある。また実践力とっていいヒアリングの例を挙げれば、ある学生は日頃中国の歴史や文化を題材とした高度な内容の教材でヒアリングの練習をして実力をつけていたが、3級の問題は、それよりもやさしい日常の話題であったにも拘らず、インプットしていた語彙や言い回しが足りなくて、僅差で不合格になった。筆記はかなりの高得点でだったのである。時間的制約の多い中での学習では、このような現象は珍しくない。教師について学習をするには、どちらの内容を選ぶべきか、答えは自ずと明らかであろう。このような場合、担当者の立場からすれば、その結果に対して負の評価はすべきではない。とまれ、授業以外の内容の試験を課すことは、それなりの意味はある。だから、学生たちが当面の学習の目標なり、習得状況の確認なり、自分で受験目的やその意味を設定・自覚して活用することは有益である。ただ、担当教師としては、数字で出された結果は、安定した実力ではないことも十分認識しておく必要があろう。検定はあくまで実力向上のために活用すべきものであって、その結果に左右されるべきものではない。そこのところを誤ると、中国語インテンシブプログラム本来の目的や目標を見失うことになり、検定さえ合格すればよしとする、本末を顛倒した姑息安易な方向に流される危険性がないとは言えない。一部の人

の思い込みや誤解を解くために、敢えて一言付言しておくことにする。

[補説]この原稿を提出してから、後記試験が始まった。3年生の状況を紹介しておこう。先ず作文であるが、3年生の後期は自由作文である。自分の書きたいことを書いて、ネイティブの先生に修正してもらったのを“黙写”である。600字から、長いになると900字余りの文章である。これが短期間の準備期間であったにも拘らずよく書けていると、担当の先生の驚きの声である。次に早読みであるが、約750字の長文を2分15秒に時間を設定したのを、全員が1分55秒前後で読み上げた。かなりの速さである。1分40以内で読めるまで練習をすれば、おそらく自分の意思とは関係なく口や舌が勝手に動き出すであろう。その感触がつかめたという。ここにきて、各授業科目の相乗効果の兆しが見えてきたのである。1年生の前期と後期の発音、音読と反訳。2年生前期と後期の“黙写”と早読み、それに2年生前期の作文。これらの教育・学習が、3年生の後期になって、有機的に結び付き、その効果が出てきたのである。もちろん他にも、講読や聴解など全ての中国語科目でインプットした中国語が陰に陽にプラスの作用をしている。まだ十分とは言えないが、第一期中期計画の最終年で、しかも完成年度には満たないインテンシブ四期生の3年生の段階で、その兆しと方向性が見えてきことには大きな意味がある。完成年度の入学生である今年の1年生の後期試験の反訳問題は、例年より分量を多くしたのにも拘らず、2科目とも全員がほぼ完璧に近い出来であった。